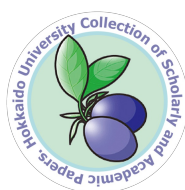




Title	シベリア要塞線とアジア貿易 : 1830年のシベリア税関区からの報告が語るもの
Author(s)	中村, 朋美; NAKAMURA, Tomomi
Citation	日本中央アジア学会報, 19, 38-40
Issue Date	2023-07-31
DOI	https://doi.org/10.14943/jacas.19.38
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/94174
Type	journal article
File Information	JB19_007nakamura.pdf



シベリア要塞線とアジア貿易

— 1830年のシベリア税関区からの報告が語るもの —

中村 朋美

1. はじめに

19世紀前半にロシアとカザフ草原、中央アジア諸ハン国、新疆との貿易(以下、アジア貿易とする)が拡大したことは論を俟たない。先行研究は、半世紀を通じたキャラバン貿易の規模拡大とロシア当局による貿易推進を論じてきた。

ところで、シベリア要塞線地域を管轄するロシア現地当局は、アジア貿易を当地においてどのような意味を持つもの、利益となるものと捉えていたのだろうか。ロシア当局の見解や構想に関する研究として、例えば18世紀オレンブルクにおけるキリーロフの構想や1845年に新疆北部に潜入したリュビーモフの調査に関する研究はよく知られているが、そのほか現地当局の見解や構想については、これまでさほど関心を払われてこなかったように思われる。

2. ロシアはなぜアジア貿易を推進したのか？

そもそも、ロシアはなぜアジア貿易を推進したのか。先行研究は、その理由として、①ロシア軍部隊による馬の確保、②ロシアの工業製品の市場開拓、③ロシアの国内産業のための原材料の確保、④関税の確保、⑤商人にとっては大きな利益をあげられる可能性のある事業であったこと、⑥貴重なインド産品の入手、⑦未開の諸族への接近をあげるが、これらの理由を半ば自明のものとして簡潔に記述するにとどまっている。ロシアの中央アジア進出の実利的原因を明らかにするためにも、当時の構想や見解の詳細を再検討する必要がある。

そこで、本発表は、カザフスタン共和国中央国立文書館所蔵の史料のうち、1830年にシベリア税関区から提出された、シベリア要塞線経由のアジア貿易に関する報告に注目し、上記の課題を検討した。

3. シベリア税関区とは？

シベリア税関区は、中央アジアおよび新疆との商業活動を管理するため、1824年法令によりオレンブルク税関区から東半分を分離して設立された。ロシアは南の遊牧民から居住地域を防衛するため多くの要塞線を建設したが、そのうちのひとつ、シベリア要塞線上に当税

関区は設置された。そこでは、税関区を構成する税関もしくは税関支署が、ペトロパヴロフスク、セミパラチンスク、ブフタルマ、プレスノゴリコフ、ニコラエフスク、オムスク、コリャコフスク、ウスチ・カメノゴルスクの要塞都市に設置された。要塞都市は防衛とともに、貿易地としての機能も果たしたためである。

1830年のシベリア要塞線は、行政上は西シベリア総督府下のオムスク州に属し、軍制上は当要塞線で国境警備の任務をおったシベリア独立軍団のもとにあった。ただし、税関区長官房は財務省貿易局の管轄下にあり、税関区長は総督府や軍団からある程度の独立性を保持していたと考えられる。

4. 1830 年報告の概要

本発表で検討した史料は、1830年11月1日付で財務省貿易局局長に送付されたシベリア税関区長の報告 [ИГА РК, ф. 806, оп. 1, д. 42: л. 14–29] である。この報告に先立ち 1830年8月22日付で貿易局局長からシベリア税関区経由の貿易に関する11項目の質問が送達されており、これに対する回答が今回検討した報告である。

5. シベリア税関区から見たアジア貿易の意義は？

シベリア税関区長はシベリア要塞線地域においてアジア貿易をどのような意味を持つものと捉えていたのか。税関や財務に関わる者の見地に立った見解であることを踏まえつつ整理すると、税関区長は次の点に意味を見出していたことが読み取れる。①再輸出品や国内産業の原料の調達、②シベリア諸都市の工場で製造された商品の輸出、③現地資本の成長の手段、④ロシアの工場製品の販路拡大の可能性、⑤高価なアジア製品の入手手段、である。

①は輸入品がヨーロッパや清に再輸出されたり、ロシア国内の工場や要塞線地域の産業の需要を満たすものであったりしたこと、②は①とは逆にシベリア諸都市の工場で生産された商品がシベリア諸税関から輸出されたこと、③はアジア貿易がロシア人商人の成長を促し、現地資本の成長と産業開発に寄与するという考えがあったこと、④は従来の主要輸出品（金属製品、皮革製品）と同様に、1830年を境に新たな主要輸出品になっていく工場製品（毛織物、綿織物、絹織物）の、利益をもたらす市場の獲得を期待していたことを示している。なかでも③に関しては、ロシア人商人の貿易参入に伴い、現地において中央アジア商人やシベリア・ブハラ人と競争が生じていたことが読み取れるのである。

6. おわりに

1830年報告が語るアジア貿易推進の理由は、先行研究が示す理由から大きく外れるものではない。しかし、西シベリア地域やシベリア要塞線諸都市における商業資本を成長させ、地域の産業の開発を促すものとして、アジア貿易の意味を見出していたことを指摘できる。

この状況で、税関区長が地域の経済発展のために重視したのは現地ロシア人商人の成長であり、それまで貿易を主導してきた中央アジア商人やシベリア・ブハラ人は競争相手に変わっていたことが浮かび上がるのである。

参考文献

ЦГА РК: Центральный государственный архив Республики Казахстан

(日本学術振興会特別研究員 RPD・京都大学)